

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.103 2026年6月14日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ： <https://www.keihinkyodougekidan.com/bunkano-nakama/>

目標を超える観客で好評でした

20年目で記念すべき第10回を迎えた川崎郷土・市民劇は、5月9日、10日(多摩市民館)、16日、17日(エポック中原)に、大西弘記作・演出「あるくうた〜九ちゃんに逢いたくって〜」が開催され、目標数を超えるお客さんが観劇して、好評のうちに終了しました。出演された方や観劇された方から感想を寄せていただきました。

「あるくうた」のように

井田 龍典

第10回川崎郷土・市民劇「あるくうた〜九ちゃんに逢いたくって〜」公演にて、ダブルキャストの1人として、主人公・来生輝役を演じました。18年という歳月を賭けて追いかけてきた夢を諦めるとき、彼が何を思うか、世間から否定されるなかで自分を肯定できるのか？という重要なテーマであり、役づくりにおいては非常に苦労しました。一方、輝を演じるなかで、あるいは輝として劇中の温かな人々に触れるなかで、自身の行動で答えを見出していく輝自身の強さ、そして周囲の方々がそれぞれに抱える苦悩とそこから逃げずに正面から対峙する勇氣にも触れることができ、自分自身の人生における拠り所の一つと言える素晴らしい経験となりました。

また、実際に演じるなかにおいては、相手役との関わりのなかで、その一瞬一瞬に生まれては消える創造

性・一体感・新しい感覚があり、二度と全く同じ芝居はできないからこそ一瞬に賭ける、という素晴らしく貴重な時間を過ごさせていただきました。

制作サイド、演出の皆様、舞台を支えてくださったスタッフ、ボランティアの皆様、出演者の仲間含めこの座組を支えてくださったすべての皆様に感謝しております。

また、観に来てくれた小学校・中学・高校・大学・会社・社会人の仲間たち、そして家族親戚。貴重な時間を割いて観に来てくれる皆様がいる、そして、その皆様に胸を張って観ていただける演劇を作れたことに感謝です。

輝の最終盤の台詞に、「(時代を超える「あるくうた」のように) 僕たちも時代を歩けば」というものがあります。今回の参加を通じて、沢山の人の演劇にかける情熱・プライド・期待・感謝・愛情のようなものが折り重なって一つの作品が出来上がっていることを実感しました。たとえ担う人が変わっても、このような表現にかける想いは時代を超えていくのだと思います。私自身、「あるくうた」のように、時代を生きる

写真撮影©長坂クニヒロ (以下同)





1人として、川崎で表現者たちが担ってきた歴史に感謝しつつ、次世代に笑顔でバトンを渡せるよう、今後も何らかの形で表現活動に生きていければと思っています。

最後になりますが、私にとってこの経験は、ミューザ川崎の掲示板でたまたま目に止まった出演者募集ポスターから始まりました。掲示板の前で立ち止まる私に対し「やってみたら？」と参加を後押しし、役オーディションでは「主役に挑戦してみたら？」と悩む自分を励まし、夜な夜な稽古に出ていく自分を（小言をはさみつつも）応援してくれた妻にも感謝の言葉を贈りたいと思います。

ありがとう！

新しい自分を知ることができる

榊原 なつめ

去年の演劇まつり『チト』で初めて市民劇を知り、参加しました。正直言えば、終わった直後はもうしばらく演劇はいいかなという感じでした。これからの人生で細く長く演技ができればいいなと思っていたこと、そして前作の現場で自分の無力さを痛感したからです。演劇の大変さと実力不足に少し心が折れていま



した。でも数か月後に大西さんたちとご飯に行った時、当たり前のように「やるでしょ？」と言われ、「ああ、まあ、はい」と成り行きで返事をしていました。

その後のワークショップ・オーディションでは、新しく出会う個性的な方々に圧倒され、人見知りな自分が本当に仲良くなれるだろうかと不安になりました。同時に、チトの時よりも全体の年齢層が高めで演劇経験がある方が多かったのは、どこか心強かったです。

やるからには皆勤賞を取ると意気込んでいたのですが、実際は稽古前に涙が止まらず2回ほど遅刻しました。色んな人の色んな想いを勝手に想像しては、どうしてその考えや発言になるのかと一人で悩み、辞退も考えました。モチベーションの低下というより、自分より上手い人がやったほうが作品のためになるんじゃないかと本気で考えていたのです。

ただそんな時、次に出会う舞台の台本で、自分が演



じる役がここにいる50人の誰かと同じ思考回路をしていたら、自分はその役を分かってあげられるのかと考えました。突っぱねているだけでは演じる役とも分かり合えない、それは役を放置しているのと一緒だなと気づいたのです。日常生活では、嫌いな人は避ければいいというのが大人の賢い考え方だと思っていましたが、私が演劇を続ける上ではそれは違うなと思いました。そんな時、同級生に昔言われたことを思い出していました。座組の仲が悪くなってきた頃、その友達が「みんなやっと一生懸命になってきた」と言ったのです。当時は不安しかありませんでしたが、本気になるからこそ人とぶつかっていくんだなと、今になって深く実感しています。

これは私が市民劇を続けていきたい理由でもあります。だからこそ、自分をもっと表現者として人間として成長して、初めて参加する人をすぐ隣でサポートできるようにしたいです。

今回「九ちゃんだから」という理由で、初めて参加して下さった方が何人もいます。そういう方は演劇が初めてだからと何度も不安そうに口にし、稽古中も「何度もやり直させてごめんなさい」と申し訳なさそうに頭を下げます。でも演劇は、貰った役と照らし合わせて新しい自分を知ることができるものだと思っているので、そんな謝罪の言葉を言わさないようにしたいと強く思います。その人がどんな風に生きてきたか、何を考えてきたのかが少しでも見えたら私はすごく嬉しい、むしろ演技基礎を学んでないからこそ、その人にしか出せない計算のない素晴らしい唯一無二の魅力があると思っています。そんな魅力をこれから出会う人にも見つけられていけたら良いなと思います。



あるくうたなのか、うたがあるくのか

佐々木 和子

今回は歴史ものでなく、昭和生まれの九ちゃん。九ちゃんの母校は、私の子どもたちの母校川崎小学校。毎年、命日に合わせて、子どもたちが九ちゃんの歌を歌うイベントがある。

そんなこともあって、どんな話になるのか楽しみに出かけた。

開幕と同時に行きかう人、人。しかもみな急ぎ足で。確かに人が多いし、みんな急いでいるこれが川崎。夢を追いかけてオーディションを繰り返す青年と、どこにもいそうな、話好きな老人。二人をつなげたのも九ちゃんの歌だった。

後半、舞台と一つになって、手拍子、歌って、バラバラな観客がつながってゆく。楽しい気分で帰ってき



た。

と翌日、ブラジルに住む娘から動画が送られてきた。母の日イベントに、全校生徒、幼児から五年生が「上を向いて歩こう」を日本語で歌っている!!

改めて歌詞を読んでもみると、どれも市井の人々が主人公だ。歌い継いでいかななくては。

一方、この瞬間ミサイルに怯え、おなかをすかしている子どもたちがいることをわすれてはいけない。

(文化の仲間会員)

市民劇「あるくうた」に参加して

海老名 信吾

今回、川崎郷土・市民劇に参加させていただいたのは京浜協同劇団での第98回公演「黒と白のピエター—種子を粉にひいてはならない—」に参加させていただいたことに起因しています。翌年の第99回公演「深い疵」でも裏方として関わらせていただき、その時に「あるくうた—九ちゃんに逢いたくって—」の話を伺いました。





作・演出が東京ハンバーグの大西さんだということも知り面白そうだな。大西さんの演出受けてみたいなという軽い気持ちと、オーディションというものを受けたことがないので経験してみたいという安易な気持ちでオーディションに参加させていただきました。

そして、オーディションに向かうのです、今回の主人公である来生輝のように。

どんなことを行って、どのような評価されるのだろうか？なんて、ドキドキしながら。しかしながら僕が思い描いていたオーディションとは違ったのです。いろいろな意味で違ったので、面白かったです。

その後、演出の大西さんにワークショップを行っていただき、年明けには台本が配られ、読み稽古を行っていくのですが、学生の頃にギターを弾いていたので、来生輝役を演じたいなと思ってしまい。まさかまさか、ここでオーディション形式での楽曲演奏を行いました。あまりの緊張に手が震え、ほとんど何もできなかった苦い記憶です。一曲歌った後も緊張しすぎてずっと手が震えていました。今思い返しても全然できてなかったなと思います。

その後も稽古は続いていき、ついに配役決定の日、来生輝の役をいただきました。やりたかった役がいた



だけなかった人も多くいるなか、やりたい役をいただけたこと、とても嬉しかったし、やれなかった人の為にも頑張ろうと心に秘め、稽古は進んでいくのですが、稽古中「あるく組」の来生輝役である井田龍典さんの演奏が素晴らしくて、悔しさと頑張らなければと強く思ったことは忘れられません。しかしながら、自分にはそこまでの技術がないので、何とか成立させようと、知人のミュージシャンに教え乞うたり、毎晩のようにギターを弾き続けたりと、必死でした。おそらく稽古場にいた皆さんが私の演奏にはハラハラしたのではないかと思います。

でもそんななか、共演者の皆さんから温かい言葉や激励の言葉をたくさんいただいて、ようやく何とか“見られる程度”にはなれたのではないかなと思います。

本番迎え、初日は緊張のなか、過集中だったなと思っ



てはいるものの最低限はやれたのかなと考えていましたが、それでもまだまだできることがあると思って、

そこからたくさん悩んで、私自身が来生輝を演じる意味を考えました。

色々な覚悟をもって演じる。
悩んで悔しくて大変だと感じた公演ですが、千穂楽は自分らしく演じられたのかなと思います。ちゃんと楽しみました。

本当に、色々な人に支えられながら走り抜けられたと感じています。

関わっていただいた皆様に感謝しています。ありがとうございました！！

ありったけを籠めて

大西 弘記

蓋を開けてみれば創作面も制作面も結果として大成功に終わった市民劇、これはキャスト、スタッフ、実

行員、川崎文化財団、当日運営でお手伝いに来てくださった方々、全員で獲得した成功であり、素晴らしい公演だったと思う。しかしながら、創作面でも制作面でも反省点というか改善点もあり、ポジティブに捉えるとそれは今後への課題を獲得したことにもなる。外注の立場ながら脚本と演出を担当した自分としては、主戦場を小劇場としながらも自分の持ち場へ持ち帰る獲得が幾つもあり、尊い経験値となった企画だった。

これまでの市民劇は川崎に纏わる歴史上の人物であったり出来事だったりモチーフとなり大きな銅像や立派な記念碑みたいな演劇で、それも市民劇ではあると思うけれど、僕の場合は普通の人がこの川崎という地で精一杯に生きている姿を描くこと、それも市民劇だと思っている。歴史も大事だし、教科書に載っていることも大事だけれど、もっと大切なものが僕にはあるとされていて、それって何だろう？と考えることが好きというのもある。答えを出すではなく問題を考



える、そのために創作する側は何と向き合うべきなのか？ その向き合った何かと観る側も劇場で向き合うことになる。それはとっっても普遍的なものであり“生きる”ということなんだと思う。

そういえば開演前のアナウンスでスマホの電源を切ってくださいとお願いしても、どのステージでも客



席から着信音が何度も聞えてきた。とても良いシーンでも聞えてくるものだから演者たちが気の毒で仕方がなかった。芝居に集中しているお客さんも同じだし、鳴らしてしまった本人が一番に気の毒だろう。これってどうしてなんだろう？と考えてみた。それは単純に演劇を観るという文化に触れる機会が少ないからなんだと思う。もっと生活の傍に演劇があれば、劇場に入れば一番にスマホの電源を切るという習慣が身につくのだと思う。この習慣は演劇を観ない時でも何かの役に立つと思う。それは心配りでもあるし、目配りでもあるし、心配りでもあると思うから。そのためには、やはり市民劇を続けてゆくことだと思う。年に一回ではなく、二回、三回と、兎にも角にも本当に芸術というカルチャーを人や街に根付かせるために、演劇人は踏ん張っていかなくてはいけない。演劇を演劇人のものだけで留まらせることなく、もっともっと沢山の人へ演劇の素晴らしさが届くように。

社会や歴史を切り裂く作品も良いと思うけど、俺は社会や歴史を切り拓く演劇が好き。そこに生きる人たちがいて、その命に寄り添うような演劇が好きでたまらない。そういう演劇に何度も何度も心が救われ、憧れ、目指してきた。今回の『あるくうた』も、そんな想いを、ありったけ籠めてみた。



行事には多くの皆様のご参加を

文化の仲間にかかわるこの間にあった出来事と、今後計画しているの行事などをお知らせします。行事には皆さんの積極的なご参加をお願いします。

事務局長 山木 健介

菅野章さんを偲ぶ会

2026年2月23日に横浜桜木町の「横浜市従会館」で、2025年6月10日に87歳で亡くなられた菅野章さんを偲ぶ会が開催されました。

音楽センター代表をしていた菅野さんにふさわしく音楽と歌で故人を偲ぶ集いでした。菅野さんの娘さんも挨拶をされました。劇団からは城谷護さんが参加され献杯しました。

2023年12月25日に交通事故にあい、闘病生活をされていましたが、事故にあわなければ今も元気な笑顔で文化の仲間の集まりにも参加されていたと思うと残念です。

菅野さんの人となりを語り合い、ご冥福をお祈りする集いでした。

平和憲法作品展

8月1日(土)～2日(日)に、劇団の稽古場で「平和憲法作品展」「対談」「朗読劇」を開催します。

5月25日に神奈川新聞から電話の取材がありました。掲載すると言っていました。

平和でなければ趣味の作品を作ることもできません。

平和に反するものでなければ、どなたでも趣味の作品を展示できますので、8月1日の午前中に劇団に作品をお持ちください。

また、対談と朗読劇もありますので、ぜひ劇団においでください。

会報51号から100号までの合冊本を発行

多くの方のカンパやご支援をいただき合冊本を発行することが出来ました。

文化の仲間の会員の皆様には無料でお送りします。手違いで届かなかった場合は連絡をください。お送りします。

また会報1号から50号までの合冊本も在庫がありますので、持っていない文化の仲間の会員は、連絡をください。お送りします。

総会を9月27日(日)に開催します

第28回総会を開催します。会報97号から100号までに「私説・京浜協同劇団の歩み」を連載していただいた城谷護さんにゲストとしてお話ししていただきます。ぜひご参加ください。

第2回 平和憲法作品展

展示会 (スペース京浜1階) 8月1日13時～16時 2日11時～16時

特別企画 対談：長崎の被爆者と長崎出身の腹話術師

陣川幸子さんとしろたにまもるさん 2日13時30分～

平和を願い、憲法改悪に反対する——趣味の作品(書道・絵画・絵手紙・陶芸・写真など)を持ち寄って開催します。自由に趣味を持つことができるのは、平和憲法があるからこそです。この展示会は、どなたでも参加できます。あなたも作品を出してみませんか。

入場無料

朗読劇 (スペース京浜2階) 8月1日・2日とも 15時開演

演目 少年口伝隊・一九四五

作 井上ひさし／演出 護柔一／出演 京浜協同劇団

チケット 1,000円

原爆で印刷機が全部壊され、新聞を発行できなくなった中国新聞社が、「口伝」によって人々にニュースを伝える。その役割を与えられた3人の少年たち……。

問合せ・申込み 京浜協同劇団 文化の仲間 TEL 044-511-4951 担当(山木) 090-7218-3551

京浜協同劇団第100回公演

ニール・サイモン作／名医先生

京浜協同劇団 護柔 一

この秋に上演する「第100回公演」は、ニール・サイモン作／『名医先生』になりました。記念すべき100回目の公演に相応しく、京浜協同劇団らしい作品はなんだろう？と、年明けからの候補作品探しが始まりました。これまで上演した年表にも注目。再演できる作品があるかも知れないと考えたからです。1959年の創立からの歴史ある演目は、現在の稽古場が出来る前なので、大ホールでの公演がほとんど。舞台装置も大がかり、劇団員も三十数名の時期だったので、「よし、次はコレでいける！」と提案して上演してきた先輩たちが創って来た歴史だったことが思い出されます。稽古場公演が主となって来る後半の30年を振り返ると、4年前に亡くなった和田庸子の作品が目につきます。京浜独自のオリジナル作品の、煙突男『ミスターチムニー!』、ケーテ・コルヴィッツの『黒と白のピエタ』、撫順の戦犯管理所の土屋芳雄の生涯『人のあかし』、そして姥捨の『おりん』など魅力ある作品は、多くの客演と杉本さんの演出や音楽の安達元彦さんの力に助けられての上演成功だったことも記憶に新しい。

さて、記念すべき第100回のレパは？と出し合った候補作品は数本あり、全員で戯曲に目を通して検討を重ね、田宮虎彦原作、平石耕一脚色の『花』と言う作品1本にしぼられました。前回の『ふかい疵』と似たような戦争の被害を描く平和へのメッセージの内容は、8月『朗読劇・少年口伝隊一九四五』を上演す

ると、戦争モノの三連続となって観客にとっても「また、戦争の芝居？」になる懸念があるなど、いまひとつ全員での合意にいたることができず、再検討することに。

そして5月になって新たに提案されたのが、ニール・サイモンの『名医先生』でした。チャーホフの短篇集を戯曲化した、9つの短編をオムニバス形式にした戯曲で、登場人物が24役。日常に起こる笑いの中にある、人間のもどかしさや、おかしみを描いたチャーホフ作品の魅力が溢れた珠玉の名作。

100回目の記念公演には、昨年から入団した5人の新人を迎えて、演劇の愉しさをベテラン陣と共に経験することの大切さや、京浜の舞台デビューとしてフレッシュな顔ぶれが並ぶことになるので、まさにそれにふさわしい作品として賛同を得て決定となりました。“折り返し”“リニューアル？”そして“観客も若い層にも興味をもってもらえる”などのキーワードに添った方向で、楽しい稽古場、娯楽としての演劇を届けたい、等々の声も加味した演目が選定されたのです。もう一回り新人を入団に誘うチャンスにもなればと少し欲張りな期待も抱きながら、どんな舞台にしようかと期待に胸をふくらませています。この秋は、新しいメンバーと一緒に、ニヤリと笑える公演をお届けすることになるでしょう。演出？ 作品を提案した護柔を中心に複数の演出者が推されそうです。どうぞお楽しみに。

京浜協同劇団 第100回公演

名医先生

作 ニール・サイモン

日程 12月5日(土)／6日(日)
11日(金)／12日(土)／13日(日)

各日とも、11時、15時開演

会場 スペース京浜(京浜協同劇団稽古場)

TEL 044-511-4951 FAX 044-533-6694

HP: <https://www.keihinkyodougekidan.com/>

チャーホフの短編をオムニバス形式で上演

詳細はあらためて
チラシなどでお知
らせします

◎文化の仲間通信◎

◆腹話術の会きずな 第20回発表会

楽しい腹話術のつどい

日程 2026年7月11日(土)

午前の部 11:00~12:30 入場無料

午後の部 14:00~17:20 有料公演

会場 川崎能楽堂(JR川崎駅東口徒歩8分)

料金 午後の部 999円 障がい者・学生 500円

問合せ 腹話術の会きずな TEL044-544-3737

メール shirotanim@22.netyou.jp

HP: <https://kizuna-hukuwazyutu.jimdosite.com>

◆「しんゆりで『あの夏の絵』を観る会」実行委員会

公演 青年劇場 「あの夏の絵」

日程 7月27日(月) 14:00 開演

会場 麻生市民館大ホール

作・演出 福山啓子/出演 藤井美恵子・広戸聡・永

田江里・藤代梓・傍島ひとみ・津曲海七斗

料金 一般 4,500円 U30(30歳以下) 3,000円

中高生 1,000円(全席自由)

被爆から70年がたって、記憶を伝え残すために語り始めた被爆者と、それを受けとめ、絵に表現することに挑んだ高校生たちの2015年の物語。

申込み・問合せ たま・あさお市民劇場事務局

TEL044-911-6920

◆東京芸術座 アトリエ公演 No.49 「ひなの砦」

日程 2026年8月29日(土)~9月6日(日)【予定】

会場 東京芸術座アトリエ

作 くるみざわしん/演出 北原章彦/出演 小川拓

郎・関根学・中新井美穂・佐藤幸一郎ほか

詳細問合せ 東京芸術座 TEL03-3997-4341

◆青年劇場 第137回公演

喜劇「ワタクシたちの道徳」

日程 9月12日(土)~21日(月祝)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

作 福山啓子/演出 田中麻衣子

公共のための“教育”が権力によって歪められる滑稽さと恐ろしさを、飯沢匡作品を彷彿とさせる痛快な風刺喜劇として舞台化!

詳細問合せ 青年劇場 TEL03-3352-6922

◆劇団銅鑼公演 No.56 泣くな研修医

日程 9月24日(木)・25日(金)

会場 練馬区立練馬文化センター

原作 中山祐次郎/脚本 シライケイタ/演出 齋藤

理恵子/出演 山形敏之・北畠愛奈・久保田勝彦・

野内貴之ほか

詳細問合せ 劇団銅鑼 TEL03-3937-1101

◆第25回 たま寄席(午後の部) 子ども寄席(昼の部)

日程 9月27日(日) 昼の部 12時開演

午後の部 15時開演

会場 多摩市民館大ホール

出演者 子ども寄席 一玄亭米多朗・立川ういん・三

遊亭は馬・ドルフィン

たま寄席 一玄亭米多朗・立川志らく・毒蝮三太夫・

三遊亭は馬・立川ういん・ドルフィン

料金 子ども寄席 大人 2,000円 高校生以下 1,000円

たま寄席 S席 3,500円 A席 3,000円

自由席 2,500円

問合せ 一玄亭米多朗ファンクラブ

TEL044-944-3346

メール yoneta0609@gmail.com

◆ギャグ漫画の王様誕生 赤塚不二夫展

日程 4月4日(土)~7月26日(日)

開館時間 10:00~18:00(入館は17:30まで)

会場 豊島区立トキワ荘マンガミュージアム

料金 大人 500円 小中学生 100円

予約制 予約は当日の朝8時まで

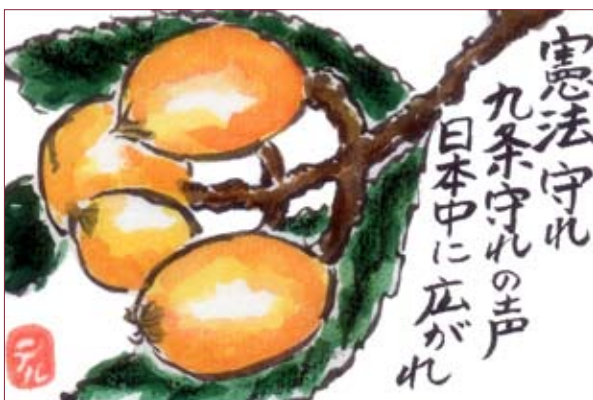
予約はHPの予約フォームから

HP <https://tokiwasomm.jp>

* * * *

●訃報

文化の仲間会員の藤井厚さんが、5月22日、心不全のため逝去されました。78歳でした。葬儀は家族葬で行われました。謹んでご冥福をお祈りいたします。



絵手紙 竹間テル子